# あとがき

わたしの現在までに書いたものといってもほんの少ししか残っていない。なぜなら、あまり残したいと思うものがなかったことにもよるが、ほんとうは「生きたい」――というやむにやまれぬ力に押されて、なりふり構わず困難な道を歩きつづけてきた、という、そのことにも因るのかもしれない。真実に残したいものは『何か』を、永いあいだ知らずに生きてきたものと考えられる。その「何か」に気づいたとき私は、東京都立養育院という代表的な老人ホームに収容されて、老人達とともに、死にいたる一条路を正確に、無駄なく、歩みつづける最終訓練の日を送りつつある自分自身を見いだしたのであった。

私の若き日は困難な道を歩きつづけたというが、歩いた、というよりは闘いに明けくれたといい得るかもしれない。家庭にたいし、社会にたいし、そうしたもろもろの観念や道徳や、歴史にたいしても私一個の批判を向けてみずから迷い、うたがい、苦しみ、反抗してひるまなかった。当然のことながら、非合法の生活環境の中で恋愛し、生活し、大新聞社の記者としても活動しながら、転々として居を変え放浪ともいえるような、無頼とも言える不毛のすえ老年に身を置いていまさら感慨という言葉も奇妙と謂えるかもしれない。

ただ私は現在の自分自身を決して不幸だとも思えないし、長い過去の道程を、闘いを、失敗だの敗北だのとは思わない。私の旅は終焉に近づいたいま、自分にも信じられないほどの喜ばしい転換を、私に齎らしてくれた。私には私の知らないところで多数の、といっても私自身の想像にもよるが――私の過去の生き方や考え方の生んだ、従って歩みつづけ、現在生きつつある軌跡に興味と関心を抱いてくれる未知の、また既知の心の友人が『在る』という事実を知ったのである。

この新しい発見までには一つの道程がある。昨年春私の心の友、相京範昭君が、常日頃私のアパートの部屋に足を運んで語りあった私との対話を、簡単な何かの形で文章として遺さないかという話を持ちだしてくれた。私はこの対話という申し出がどんなに嬉しかったか。だがこれの実現までには大きな困難があることが思われた。

相京君は大切な時間を都合して、足を運んで下さった。ある時は見とおしの樹立の下で、あるときは廊下の隅で、言葉を選びながら語り、あるときは情熱の赴くままに涙を押えながら語った。相京君の最初の言葉はわたしの胸を強く打った。

「あなたが若いときから思想やその運動で闘ったことは或る程度雑誌その他に発表されて、知る人もあることでしょう。だが、僕が思うに、あなたの生活や行動の原点となったのはわが子とのこと、即ち子との別離、愛なき結婚からの離脱であり、そのことがその後の生き方の常に立ち戻る基点になったのではないでしょうか。それをまず全部曝けだして裸になる、自由になることが必要ではないでしょうか、僕はそう思うな」

わたしはその言葉をうけいれ、それに従った。相京君の質問の言葉に励まされながら。ただ私の文章には妙な独りよがりのくせがあり、飛躍がある。その文章の印刷も一切彼をとりまく友人達の温い友情による協力の賜物であった。そして小さい六頁ほどの小冊子が私たちの友情から生まれ、『あるはなく』という題名のもとに八木秋子の『通信』として二、三ヶ月に一回の不定期刊行で知人に送られることになった。その通信『あるはなく』も第五号を重ねることになり、その反響には眼をみはるものがある。ただもう言葉以上の感謝を感じないではいられない。

こうした愕くべき経過を辿りながら、相京君はこんど、私のふるい時代の刊行物を調べて私の執筆を拾いあつめ、全集とまではいわないが「著作集」を出版することに意欲を燃やして下さることになった。今かつての著作を目前にして愛着のあるものとしては「一九二一年の婦人労働祭」「ウクライナ・コミューン」をあげることもできるが、その他は書いたという事実以上特別な感懐も浮ばない。いずれも荒削りで、素材として発表したもののように思われる。

わたしは、現在の環境の中で、校正もろくにせず、発送にも手を出そうとはせず、事務的な処理など何もせずに歩いてきた、共同生活・集団生活にはおのずから規律があり、秩序があり、自分勝手な自由な行動、生き方には規則という束縛があって勝手なことはゆるされない。私にとって最大な悩みは読みたい本が、いつでも手近なところにない、ということ、考えたいときに孤独の静寂がなかなか得られないことなどではあるが、図書室の備えはあり、そこである時間を過せるということはあり難い。

通信『あるはなく』は私が書物や原稿のはしきれまで失って屍のような老人の姿を部屋の中に置いたとき、私の若い友が心に閃いた私のよみがえりの幻像であったかもしれない。

老人の幸せとは何であろうか、私はそれをおもいつづけている。

一九七八年三月

八木秋子